

カカリア

加藤 權

最初は指導員の村西さんに連れられて、利用者さんのお宅に伺った。ひとり暮らしの女性という事しか、教えてはくれなかった。まあ、大体いつもの事だけれど。一軒家のお宅だった。三十代ぐらいの女性がベッドに寝ていた。初対面の挨拶が済むと、村西さんはしつかり見て下さいと私に言い、サービスを始めた。

次からひとりで山女さんの介助に出向いた。教えて貰った手順通りに、鍵を開け「こんにちは」と挨拶しながら、部屋に入る。部屋は真つ暗だ。そこに、山女さんが寝ている。「電気を付けますよ」と断って、明かりを付けた。山女さんがものめづらしそうにこちらに顔を向けた。「今日からサービスに入りますので、よろしく」と言い、「それじゃトイレに行きますか」と促した。掛け布団を取り、仰向けの山女さんの首に手を回して、ベッドに座らせ、左手で手摺に捕まって貰うと、ズボンの後ろウエスト部分を上に引っ張って立たせた。山女さんの後ろに回り、身体全体で支える。不自由な右足のかかとに自分の足の先を少し乗せて、押す。右足が押されて前にズルズルと移動する。やや自由が利く左足も軽く押すと、前に移動するが、身体は立つ

た場所から動かない。まるで尻餅をつく寸前の様だ。下に落ちそうになる山女さんのお尻を、後ろから支える格好になる。山女さんの尻が私の下半身に密着すると、私はその柔らかな感触に、思わず良からぬ思いにとらわれ、激しく狼狽する。もう何年も女の肌に触れてない事を、思い出し、混乱する。あそこが熱くなり、頭をもたげてくる。ヤバイよと思う。冷静にならないと強く念じる。勃起している場合じゃないだろう。

冷静さを取り戻し、介助に全力を尽くす。トイレに移動し、ズボンとリハパンを脱がし、便座に座らせる事に成功すると、山女さんの座っている股の間にチューブを垂らし、ビニール袋に溜まった便を絞り出す。どうしてこうなったのか、詳しい事情は知らない。今までも、利用者さんの病名を教えてくれる方が少なかった。看護師でもないヘルパーは与えられた介護を黙々とするだけだ。

トイレの始末をつけると、ベッドまでの移動だ。まともに立っている事も出来ない山女さんの後ろにぴったりと張り付いて、彼女を全面的に支えて、ベッドまで連れて行き、仰向けに寝かせると、ズボンを脱がせ、リハパンを破り、下半身を露わにさせてから、オムツをつける。こちらに身体を向いて貰って、オムツを尻の下に引き、今度は身体を反対側に向ける。弾力のある尻と、陰部が見える。オムツの位置を正してから、仰向けに寝て貰い、オムツを回し、テープで固定する。ズボンを履かせて、一安心だ。彼女をベッドに座らせて、お茶を入れ、何を食べるって聞く。山女さんは冷蔵庫を向いて、「あ・あ」と言う。

